協会の「調査」を手伝って

三木　昇

みき・のぼる
1951年京都に生まれる。
信州大学農学部林学科卒業。
林業会社で造林に従事後、
本協会に勤務、自然公園等
調査に従事。現在野生生物
情報センター運営委員。自
然紹介業あるいは、自然の
講釈師と自称。

はじめに

私は一九八三―八六年までの短い間だったが研究員として協会に席をおいた。そのころ協会は環境庁調査などの調査を受けており、私もその幾つかに従事していた。また協会を辞した後も調査員となって調査に従事した。

協会が調査を受けたのは、法人化にともなう財政的な意味から、収益で協会の足腰を鍛えるということもあったし、調査に当たって自然を守るという観点からの内容も盛り込みたいという意向もあったはずである。そのあたりの経緯あるは発注者との軋轢、あるいは内部からのヒモツキでよろしくないというような議論については、私の領域ではないので他の人に譲るとして、あのころの話を少ししてみたいと思う。

道立自然公園調査

協会の調査の始まりは、私の前任の島田研究員の石狩川の河川敷の鳥類調査に始まるようである。その後、道立公園の調査が始まり、環境庁のいわゆる第三回緑の国勢調査に着手した。

道立公園の調査は、公園を利用するにも保護するにも何も資料がないという状態であった。そのため基礎資料収集の必要性があった。公園に指定されてはいるものの、その基本となる自然の調査が全くといっていいほど行われていなかったのである。道の公園であり、基礎資料があるのは当然かと考えていたがこの事実に驚いた。

また、私の従事した檜山の公園では海岸線に指定地域が多い。指定当時、交通事情も今から考えると極端に悪く、ほんの見える部分だけを風光明媚として指定したという状況が読み取れた。内陸部にすばらしいブナ林などもあるのだが、それらはまったく範囲に入れられていなかった。そしてまた、ある海岸の断崖は調査時には砕石場となり、立ち入りもできないという状況すらあった。

調査に手をつけてみると、公園なのにちょっとこれは考えさせられるねということから始まった。一応一年という短い期間とはいえ、各地の先生方の協力を得て、今後の叩き台となるべき資料が集められたと思っている。各部門の調査の依頼とその報告を受けて報告書の作成までが協会の仕事であった。

自然は大切とはよくいわれるものの、公園に限らず道内各地は基本的な資料を欠くところが多い。これはなんとかしなくてはと思うしだいである。自然が壊されるのは、その地域の価値が認識されていないからで、壊されてからけしからんそんなことをして正気かと怒り、壊した側、たとえばなにか施設を作った側にしてみれば、せっかく作ってやったのになにを文句いうのだという噛み合わない論議が多すぎるのである。アポイ岳の登山道などはまったくその例である。協会には各地域の基礎資料を日頃から集めるようなシステムが必要である。

また、我々が調査したのち、その訂正や追加などその地域の自然の資料を集積する体制がないことも気になることである。調査報告書にしても道庁の中でどれぐらい活用されるのか、また担当者がかわり、その事情がわからなくなるということも考えられる。自然公園の管理についてお寒いばかりである。道にもこれらに対して言い分はあろうが、今後の努力を望みたい。

八木先生の鞄持

さてその調査時に、私は八木先生の運転手としてよくお供をさせていただいた。暑寒別道立公園の国定公園指定促進調査の折りには、山小屋に泊まって雨竜側と増毛側からの登山調査は先生の健脚を語るものであった。お供の方がいささかまいってしまった。そのほかの道立自然公園の調査にもよくお供をした。後に私も植物の調査員となったので兼用で出かけることも多かった。

ご存じ八木先生のクロス張りスケッチブック、これが調査のたびに取り出される。片手に鉛筆を持ちながら「ウーンこれはみごとですね」と対象となる風景全体を左から右へと指し示し、そして「ちょっと」とその鉛筆が紙の上を走るのである。私もお相伴して描くこともたびたびあった。「三木君はまだ形にとらわれていますね」などと評を頂戴することしきりであった。

先生のスケッチは会報でもお馴染みだが、調査報告書にもしばしば登場し、報告書を解り易いものにしていた。スケッチは地質屋さんがよく使うのであるが、私は野外での調査者の素養であると思っている。特徴をよく掴まれた図は写真より雄弁である。

こうした野外での態度や地質のことも門前の小僧で勉強になった。植物はさまざまな環境を表現しているもので、たとえばその崖が崩れ易いとか安定しているということで植物の種類が違う。湿原の成因に関する砂丘の発達など、そこに生育する植物が大地の性質をよく表現することがある。こんな立地と植物のことを考えるヒントを多くいただいた。

奥尻調査（檜山道立自然公園）

奥尻島の津波被害の記憶は新しいが、ここにも道立自然公園の調査で島に渡った。ここでこんな話もある。八木、三浦両先生とご一緒に町長を表敬訪問したことがある。うちの島にはいろいろな資源がたくさんありまして、それを活用していきたいという話があった。ふんふんなるほどご立派と話をきいていると、要は山菜について教えてくれというようなことであった。産業の少ない町ではともかくもお金につながるものが欲しいという、切実なものがあることがよく分かる訪問であった。見る楽しみというよりは、採取する資源としてしか自然は価値がないという見方である。

公園内の山を削り黒曜石の採掘もこの島にとっては重要な産業なのである。なんとも言いがたいものがあった。その採石場も最近公園の線びきについて見直しがあるというので意見を求められたが、利用されているところははずして、保護すべきブナやイタヤの森をしっかり守るようにという話しをした。守るべきとしたところを条件をつけて尻抜けにするよりも、死守するぐらいの気持ちでやってほしいものである。

植生調査

さて、もう一つの調査の柱は環境庁の第三回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）である。地面をどのような植物群落が覆っているかという植生図の作成という大仕事をしたのである。大仕事というのは北海道のおよそ五分の一ずつを毎年潰していこうというものであった。これが他府県のように五万分の一地形図数枚の作業ならばなんとかなるが、一年間に五十枚もの作業で今にして思えばよくやったと多少自画自賛である。

夏の間はこの調査のため、とにかく野外調査ばかりやっていた。現地にどのような植物群落が分布するか五万分の一の地図の中を走りまわり、地図に書き込みを行う。またそこにどのような形で植物が生育しているかを、枠を設定して出現する種類や量について記録していくのである。おかげで北海道をよくみることができたが、山の中の未舗装道路の凹凸とほこりに車の痛みも激しかった。

そして冬には作図である。夏の調査、あるいは国有林や民有林の植林地データをもとに航空写真を読み取り、地形図に作図していくという作業をおこなった。写真はカラーのものを使うのが一番なのだが高くて入手できないので、国土地理院の好意で閲覧を許されて会議室に何ケ月も詰めて作図を行っていた。

仕上げは凡例ごとに指定された色に塗り分ける仕事で、何人ものアルバイトにお願いして作業をおこなった。

使用頻度が高いという大雪山系、釧路周辺などは第二回で作成されていたので、その残りの部分を四ケ年で作成して全道をうめることができた。これは私が協会を辞した後に順次刊行されていった。

人を育てなくては

こうした作業を進める中で感じられたことは北海道の人材不足である。自然をいかした市町村の町おこしなどということを口にしながら、植物の名前がわかる人が極めて少ないということである。きれいなもの、めずらしいものをわかっている人は多い。白花のカタクリはあの沢のカツラの木の

横をすぎて…というような植物に詳しい人というのは道内にたくさんいらっしゃるが、網羅的に植物のことがわかっている人は稀である。しかも植物がどのように分布してという植生から見ている人はさらに少ない。これではとても自然は守れないのである。

知らないうちにこわされる。壊す方は悪意がなくとも知らないから山を壊して施設を作るということがなされる。このあたりは協会も自覚して事が起こる前に手を打てる。あるいは守るべきものを先に提示できるようなことでなくては、いつも後追いになってしまうのである。とはいえこれをやるには予算も暇もかかることで容易なことではない。私たちも自然環境に関心を持ってもらい、植物の分かる人を増やしたいという種蒔きをと考え多少トレーニングを行ったが、一夏のあいだに消化しなくてはならない膨大な調査を前に、やはり充分にすることはできなかった。そして人材がいないということは今も変わりないのである。

すっ飛びの三浦先生

鳥についても同様で網羅的に鳥の識別ができ、そして量的にそれを把握して調査票を作成出来る人は少ない。種数が少ないので植物よりはそうした人も多いかと思うが、鳥好きは多いがなかなか調査までという人材はいない。そんな状況の中、地域で鳥を見る人を育てようと三浦先生が足輪調査の折りなどよく出掛けられて、関心のある人達をトレーニングをしておられる。すっ飛びの二郎さんとして車を駆使して道内を回られているのは、特筆に値する活動である。地域のことはその地域の人が見ていかなくてはならない。その地域の人を育てることは重要なことである。

おわりに

調査の思い出ということで書き出してみると調査のことよりも自然を守るために何が必要かというようなことになってしまった。調査によって我々が自然情報をつかむこと、そして保護側と開発側とがその情報を共有する形が望ましい。最近、開発側も保護側を少しは気にするような時代になったような感触がある。ワイズユースを共に考えていきたいと思うのである。そして、そうした動きを理解する自然のわかる人たちも増やしていかなくてならないと活動を続けている。

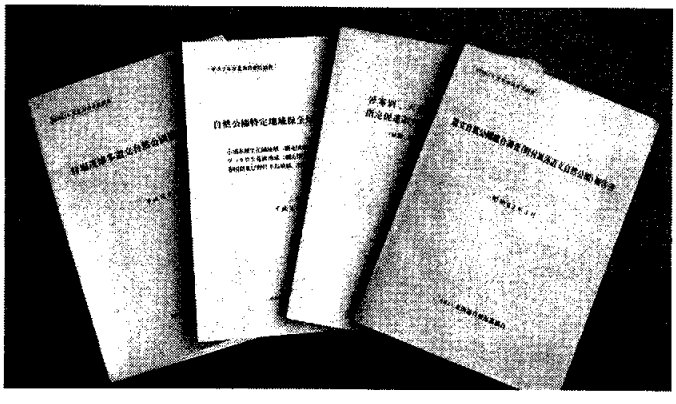

写真１　各種調査報告書

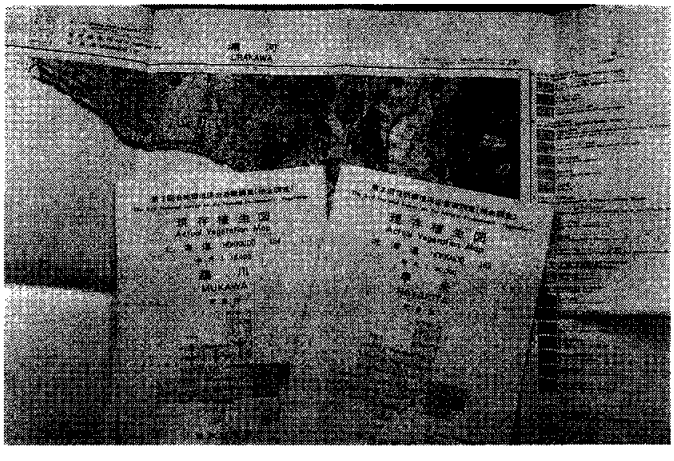

写真２　植生調査図